令和５年度

香川県議会南米・北米訪問

報告書

令和５年１１月１０日～１９日

パラグアイ共和国
ブラジル連邦共和国
アメリカ合衆国

１　訪問目的

南米にある県人会の活動を支援し、本県と現地の県人との友好親善と関係強化を図るため、令和５年11月にブラジル連邦共和国で開催される「ブラジル香川県人移住110周年記念式典」、パラグアイ共和国で開催される「パラグアイ香川県人会創立50周年記念式典」等に出席し、祝意を表するとともに、移住された方々の労苦に対し敬意を表し、より一層絆を深め、友好親善関係の強化を図り、青年交流や県内企業の進出、県産品の販路拡大などの促進、本県のＰＲ等について、引き続き御協力をお願いする。

また、経由地であるアメリカ合衆国ロサンゼルス市では、本県の栗林公園と姉妹庭園協定を締結しているハンティントン財団庭園を訪問し、両庭園の友好関係の強化を図るとともに、現地香川県人会を訪問し、関係強化と友好親善に努める。

あわせて、在外公館等の公的機関、日系経済団体等を訪問し、香川県とパラグアイ、ブラジル及びロサンゼルスそれぞれの都市との経済社会交流の展開につなげる。

２　訪問場所

パラグアイ共和国（アスンシオン）、ブラジル連邦共和国（サンパウロ）
アメリカ合衆国（ロサンゼルス）

３　訪問期間

令和５年11月10日(金)から11月19日(日)までの10日間

４　訪問者

派遣議員
　議長　新田　耕造
　議員　氏家　孝志
　議員　白川　和幸
　議員　里石　明敏

（同行者
　知事　池田　豊人
　随行職員　議会事務局２名、国際課２名）

５　日　程

	月　日	地　名	時間	内　　容
1	11月10日 （金）	香川県 羽田空港 アメリカ ロサンゼルス ペルー（リマ）	11:40 12:50 16:25 9:10 11:20 22:55	高松空港　発 羽田空港　着 羽田空港　発 ロサンゼルス国際空港　着 ロサンゼルス国際空港　発 ホルヘ・チャベス国際空港　着 【機中　泊】
2	11月11日 （土）	ペルー（リマ） パラグアイ アスンシオン	0:30 6:15 14:15 19:15	ホルヘ・チャベス国際空港　発 シルビオ・ペティロッシ国際空港　着 日系社会福祉センター訪問 パラグアイ香川県人会歓迎夕食会 【アスンシオン　泊】
3	11月12日 （日）	パラグアイ アスンシオン	10:30 12:30	パラグアイ香川県人会創立50周年記念式典 パラグアイ香川県人会創立50周年記念祝賀会 【アスンシオン　泊】
4	11月13日 （月）	パラグアイ アスンシオン ブラジル サンパウロ	10:30 13:00 14:45 18:20 20:30	JICAパラグアイ事務所訪問 在パラグアイ日本国大使公邸での懇談会 在パラグアイ日本商工会議所訪問 シルビオ・ペティロッシ国際空港　発 グアルーリョス国際空港　着 【サンパウロ　泊】
5	11月14日 （火）	ブラジル サンパウロ	8:30 10:00 11:30 15:55 20:00	ブラジル日本移民開拓先没者慰霊碑献花･参拝、日本館見学 在サンパウロ日本国総領事館訪問 ジャパン・ハウス・サンパウロ訪問 ブラジル香川県人会員農園訪問 ブラジル香川県人会歓迎夕食会 【サンパウロ　泊】
6	11月15日 （水）	ブラジル サンパウロ	10:00 12:00 21:15	ブラジル香川県人移住110周年記念式典 ブラジル香川県人移住110周年記念昼食会 グアルーリョス国際空港　発
7	11月16日 （木）	ペルー（リマ） アメリカ ロサンゼルス	0:15 12:00 18:30	ホルヘ・チャベス国際空港　着 ホルヘ・チャベス国際空港　発 ロサンゼルス国際空港　着 【ロサンゼルス　泊】
8	11月17日 （金）	アメリカ ロサンゼルス	9:30 10:30 12:30 15:30 19:00	在ロサンゼルス日本国総領事館訪問 全米日系人博物館訪問 ジャパン・ハウス・ロサンゼルス訪問 ハンティントン財団庭園訪問 在ロサンゼルス日本国総領事との夕食会 【ロサンゼルス　泊】
9	11月18日 （土）	アメリカ ロサンゼルス	8:15 12:30	Tokyo Central Gardena店視察・意見交換 ロサンゼルス国際空港　発 【機中　泊】
10	11月19日 （日）	羽田空港 香川県	17:40 20:50 21:55	羽田空港　着 羽田空港　発 高松空港　着

※　11月15日(水)の航空便（サンパウロ発）が天候不良により遅延（サンパウロ発２時間遅れ）したことに伴い、ロサンゼルス到着が当初予定より約11時間遅れとなったことから、16日(木)に予定していた「南カリフォルニア香川県人会との懇談会」、「Tokyo Centralとの意見交換会」はキャンセルになりました。

６　行事及び訪問の実施状況　（※ 各議員から提出のあった原稿をとりまとめたものです）

（１）日系社会福祉センター訪問

令和５年11月11日(土)　14:15～15:25

応対者：パラグアイ日系・日本人会連合会会長　　檜垣 竜介 氏
　　同　　事務局長 菊池 明雄 氏
　　パラグアイ香川県人会会長 山西 司朗 氏

概　要：

日系社会福祉センターは、パラグアイ香川県人会初代会長である笠松尚一様が建設に尽力された施設である。笠松様は、1936年にブラジル日系拓殖組合の派遣技師として、ラ・コルメナ日本人移住地を開設後、1971年から日系社会の組織づくりに尽力し日本人会連合会、日系老人クラブ連合会、日系商工会議所などの諸団体の長を務められた。そしてこの施設建設の協力者である香川県出身の神内良一様は1993年10月に日系社会福祉センター建設資金を寄贈され、1995年11月にパラグアイ神内社会福祉センターが完成。これを契機に1997年パラグアイ日系社会福祉協議会を発足し、初代会長を笠松尚一様が務められた。

日系人がパラグアイで安心して生きがいのある生活が営まれるための福祉増進、レクリエーション、リハビリ、福祉・医療等の活動が行われていたが、パラグアイの医療体制の更新に伴い、運営していく上で施設更新に係る設備投資に対する費用対効果が見込めないことから、2019年、併設していた診療所を閉鎖している。

現在は地方から出てきた学生の宿舎、デイサービスなどの高齢者福祉活動を行っており、新しく移住資料館の開設に向けた準備を行っていた。

施設を運営しているパラグアイ日系・日本人会連合会では、子弟の日本語教育と高齢者の福祉の２つの柱で事業に取り組むほか、JICAや外務省、国際交流基金などの研修制度を利用して後継者の人材育成、日本語教育の教師や福祉関係のボランティアの研修も行っており、最近は、連合会の中に基金を設けて、定期の利息（６～７％、最近は９％の時もある）を利用して、各団体に交付して環境整備を行っている。

高齢者福祉事業については、各地区にある老人クラブで月に１度例会を開いたり、健康体操を行ったりしている。また、月に１度か毎週実施しているデイサービスをサポートするボランティアの研修や日本への派遣研修をしている。全国の老人クラブ連合会の活動としては、年に１回、情報交換のための機関誌を発行したり、交流会を持ち回りで開催している。また、シルバー川柳コンクールを実施し、今年で８回目になるとのことであった。

パラグアイへの日本人移住50周年の式典関連でイベントを実施して以降、10年毎に式典・イベントを実施し、2016年に80周年記念式典が行われたところである。また、60周年の時に式典と併せて農産品の展示と移住資料の展示を行ったが、この移住資料の展示物がいくつか残っており、日系社会福祉センターの空いた部屋でこれらの資料を活用しての移住資料館を行っている。ラパス、ピラポ、イグアスにはそれぞれの移住地の移住資料館があるが、連合会では、戦前の移住地から戦後の移住地を網羅したものを展示しており、これらを見て先人の苦労を知ってもらうのも１つだが、厳しい時に移住者が日本人会をつくり、相互扶助で学校を運営したり、農協組織で生産活動を行ったりした日本人の良さを後進の若い世代に知ってもらいたいとのことであり、限られた移住資料ではあるが、記念誌等で

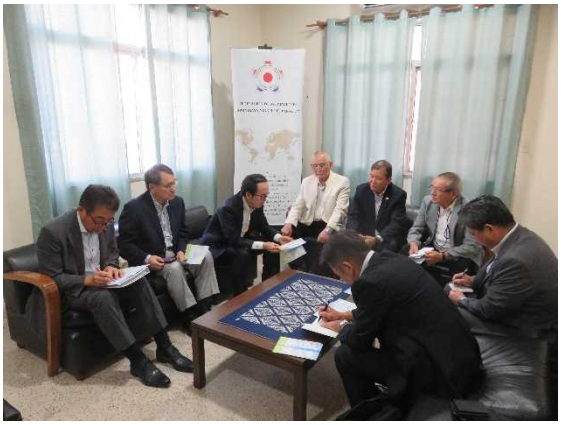
写真が保存されているため、今後の課題としてデータ化し映像で見られるようにすることにより、オンラインにおいて広く移住学習ができるようにしていきたいとの思いを伺った。

施設３階の展示室では入植当初から現在に至るまでの写真展示とともに持ち込まれた開拓用ののこぎりや斧、切り倒した木々を製材し家を建てるためのカンナやノミなど当時の方々が日本から持ち込んだものをはじめ、現地で調達された機材などが並べられており、戦前のパスポートも拝見した。

入植当時、原生林に覆われたラ・コルメナの木々は日本の木よりも固く、日本のノコギリなどが通用しなかったこと、そういった木を１本１本人力で切り倒しながら、伐根し農地を切り開いてきた話を伺い、国策でこの地に踏み入れながら理想からはかけ離れた現実に絶望したことであろうことは容易に想像できた。

しかしながら帰ることもできず、この地を開拓し、生活していくという覚悟を決めた、日系人の方々に対する尊敬の念を覚えた次第である。

センター１階には様々な日本の蔵書が置かれており、日本語がしっかりと受け継がれていること、そしてこういった書物で日本文化に触れる機会を設けていることに注力されていることが印象に残っている。



日系社会福祉センターの説明

移住資料館での展示物の説明

（２）パラグアイ香川県人会歓迎夕食会

令和５年11月11日(土)　19:15～21:25

出席者：パラグアイ香川県人会会長 山西 司朗 氏ほか県人会役員等10名、訪問団９名

概　要：

山西会長様とご息女様、岡本副会長様をはじめ、入植初期に尽力された笠松様のご息女様、前会長平井様ご夫妻とご子息様、南部で農業を営む山神監事長様と娘婿様、事務局を勤める山下様と席を挟んでの会食となった。

パラグアイで古くから日本料理を提供する「hiroshima」というお店で、日本の筑前煮など家庭料理をいただいた。

我々訪問団の紹介の後、山西会長からご挨拶をいただき、知事のお礼、新田議長の乾杯の挨拶の後、入植された経緯やこれまでのご苦労、近況などをお伺いした。

平井前会長とその奥様からは、入植の過程をお話しいただいた。平井様は昭和13年に５男坊として生まれ、日本国内で自動車整備士の資格をとりながら将来に対する不安を抱え移住を決意されたとのことであり、移住船の船底に簡易な棚を

つくりそこで50日の航海を過ごしたそうである。

30歳の頃、日本国内で入籍していた奥様が移住してくることになったそうであるが、その頃、平井様は病に伏せられていたそうである。県庁から連絡を受けた奥様は病状もわからず「とにかく行って看病しなければ」と船に乗り込んだそうである。おりしも移住船アルゼンチン丸最後の航海(この後航空便になったそうである)ということもあり、取材を受けたり、ご主人とは違い一般客室での航海で、船上では様々な催しがあり、楽しく航海できたとのことである。

平井様の記憶では移住は国策でもあり10年おきに日本から報道機関が取材に来ていたそうだが、40年目くらいを最後に来ていないとのことである。

パラグアイの自動車販売会社に雇用され、サラリーマンだったこともあり、平井様のことが記事になることは少なかったそうである。雇用先や自動車の普及にも助けられ、信用を積み上げられ年金を受けるに至っており、県人会の維持発展に大きく寄与された。日本人は勤勉で互助の精神もあり、大変信用されており、それを誇りに感じておられた。

山神様は、南部で600haの農場を持ち、大豆や麦、トウモロコシの生産を行っており、ご両親、兄弟と入植されたが、原生林を切り開き、大変なご苦労を重ねて現在の面積を開拓されたとのことであった。

山神様は兄の怪我などで家族の労働力を確保するため、学業を捨てて農地の開拓に若い頃の全てをささげたとのことであった。また、工夫を重ねながら規模を大きくしたものの自然災害には抗えず、収穫前に全滅したり、価格面で採算に合わないなど辛酸を舐めてきたこと、現在もアルゼンチンのハイパーインフレの影響でパラグアイの農作物が売れず、アルゼンチンの安価な品物が流通しており、売り残しが出ているなど、常に不安を抱えているとの話を伺った。日本のような補償制度や、農業機械購入の補助もなく、金融機関からの借入に頼ってきたことから災害時の対応は常に自己資金だったと胸のうちを語ってくださった。

懇談の様子

（３）パラグアイ香川県人会創立50周年記念式典・記念祝賀会

令和５年11月12日(日) 10:30～14:30

出席者：パラグアイ香川県人会役員・会員等、来賓、訪問団　約90名

概　要：

宿泊先のシェラトン・アスンシオン２階のレセプション会場において開催された。

県人物故者に対する黙祷、パラグアイ・日本両国国歌斉唱の後、パラグアイ香川県人会の山西司朗会長から式辞が述べられ、池田知事、新田議長、在パラグアイ日本国大使館の中谷好江特命全権大使、パラグアイ日本人会連合会の檜垣竜介会長、パラグアイ日本都道府県人会連合会の栗田馨会長より祝辞があった。池田知事と新田議長から、移住高齢者表彰、記念品贈呈等を行い、移住高齢者表彰の受賞者から謝辞が述べられた。

祝辞を述べる新田議長

記念撮影

式典終了後には、記念祝賀会が催され、高畠JICAパラグアイ事務所長の乾杯の音頭の後、県人会員等と意見交換を行った。

１つのテーブルに６～７人の日系の方が着席し、議員も１人配席されており、祝賀会が進む中でお話を伺った。あるテーブルの一例をご紹介する。

30歳代の農業を営んでいる２世の方は、パラグアイの農業は補償制度もなく、被害が発生しても植え直しをし、農業機械の導入も支援はないとのことながら、ないことが当たり前であることもあり、日本の制度に感心しておられた。できあがった農産物の写真を見せていただいたが、非常に良質で販売単価も平均的な所得を勘案すると比較的高値で動いている話を伺った。ただし、気候変動の影響は南米でも顕著で、雹などの自然災害や大雨などによる収穫不良などが頻発し、なおかつ、国境を面するアルゼンチンのハイパーインフレによる低価格のアルゼンチン産の野菜の流入など経営は不安定であることを伺い、販路の安定的な確保は全世界的な課題であることを認識した。

地元で市議会議員をされている２世の方とは話がはずんだ。40歳代で議員になったばかりとのことであるが、パラグアイの地方選挙の内情など具体的な話を伺うともに、県議会での活動や政策についてお話をさせていただいた。

また、飲食店と車のディーラーをされているという２世の方にもお話を伺った。飲食店は日本食を提供しており、日系人だけでなく現地の方も訪れるとのことであり、海のないパラグアイではあるが、エビや鮭などを使ったお寿司は非常に人気があるとのことである。車の販売では、日本の中古車をメーカー問わず販売しており、移動途中のバスで見たバンパーのない車の話をすると、登録前でも乗ることができるとのことでナンバーを取り付ける前の車がそのバンパーのない車ではないかと教えてくれた。

時間の許す限り、お話をさせていただいたが、我々訪問団のメンバーが全席に着くことは叶わず、できればせっかくパラグアイ各地からこの日のために来た日

系人の方々と交流し、日本の話をする機会をつくることがひいては県人会の維持と発展に大いに寄与するとのご意見を伺い、同感の思いを強くした次第である。

また、祝賀会では、日系人や日本文化に興味を持つパラグアイの若い人達が元気一杯の和太鼓の演奏を行った。運営を若手中心に移して世代交代を考えているとの話で、今回の祝賀会は２世、３世の方が中心で企画をしたようで、できるだけ次の世代に託そうとする気持ちが表れていた。

県人会会員との懇談

和太鼓の演奏

（４）JICAパラグアイ事務所訪問

令和５年11月13日(月) 10:30～11:50

応対者：所長 高畠 千佳 氏、次長 若林 敏哉 氏 外

同行者：パラグアイ香川県人会会長 山西 司朗 氏

概　要：

日本の政府開発援助（ODA）実施機関である国際協力機構（JICA）のパラグアイにおける活動状況や現地の状況を聴取し、本県企業の進出可能性について助言をいただくとともに、本県における人手不足問題についても意見交換を行った。

・パラグアイの主要な産業は農牧業で、大豆の生産量は世界６位だが輸出量では世界３位で、この栽培技術は日系の移住者が導入したものである。
・１人当たりの国民総所得(GNI)は近年ずっと伸びていて6,000ドルになろうとしている。失業率は6.9%で日本の約２倍である。
・日本からの移住者の勤勉さ、誠実さが評価されており、超親日的な国の１つである。
・日系社会が活発に活動しており、日本企業にとっては入りやすい国である。日本語でビジネスできる人が多いため、最初に日系人とタッグを組めばこちらの希望を理解した上でパラグアイ側に説明いただけるなどのメリットがある。
・パラグアイのマーケットだけを見ると人口700万人ぐらいで大きくはないが、パラグアイを拠点として、ブラジル、アルゼンチン、チリも見据えると非常に大きなマーケットになる。（メルコスール、３億人規模の市場）
・ブラジルからパラグアイのチャコ地方を通ってチリまで続く南米大陸横断回廊があと数年で完成予定であり、これを使ってチリまで物資を出すことができ、水量が不安定で常に渋滞しているパナマ運河を通さず輸送することができるようになるため、貿易における競争性も出てくる。
・パラグアイに原材料を輸入後、６か月以内に生産量の90%以上を輸出する場合、

大幅な減税効果のあるマキラ制度があり、パラグアイに拠点を置くと税制上有利になる。さらに人件費も安く、電力と水が安いというのがメリットである。

・中南米対象の企業マッチングを行っており、パラグアイが対象になれば、連携して、関心がある企業に香川県から声がけしていただけるとありがたい。

・日系人で日本に働きに行っている人もおり、高知県では、専門学校で英語やスペイン語での説明を増やすことで、県内の専門学校に外国人も入りやすい環境を整えており、日本語を勉強しながら、働くこともできる。

・若年層は日本のアニメに大変に興味があり、そのことが日本語を学ぶきっかけとなっている。

アルゼンチンやブラジルなど周辺の経済大国の影響を受けやすく、まだまだ脆弱な交通インフラ整備も含め、パラグアイ国家の基盤となるインフラ整備などに今後JICA等政府関係機関に積極的に取り組んでいただくことで、日本とパラグアイ両国の２国間の関係強化をより一層進めてもらう必要がある。食料問題やカーボンニュートラルなど国際間の取引も今後考えられることから、こういった政府関係機関の取組みを我々県議会もしっかり認識し、技術支援できる企業や、高度な技術を持った人材の送り出し、パラグアイからの人材を受け入れ、県内での技術教育なども行っていくような取り組みが必要であると考える次第である。

JICAの取組みの聴取

記念撮影

（５）在パラグアイ日本国大使公邸での懇談会

令和５年11月13日（月） 13:00～14:30

応対者：特命全権大使 中谷 好江 氏、参事官 井上 琢磨 氏、領事 橋本 真志 氏

同行者：パラグアイ香川県人会会長 山西 司朗 氏

概　要：

大使から、パラグアイの情勢やパラグアイと日本との関係についてご説明を受けるとともに、本県に対する要望をお伺いした。

・パラグアイは親日的な国、台湾と外交関係がある数少ない国。サンティアゴ・ペニャ・パラシオス現大統領は日本の支援でアメリカ留学ができたと発言しており、44歳で親日家。

・パラグアイは南米の中でも比較的治安が安定しており、資本主義・民主主義を守っていこうとする意思を持っている。

・鉱物資源が少なく、対米ドル為替相場も比較的安定している

・国民の平均年齢が若く、賃金は最低賃金が337ドル／月と安価で、高い生産年齢人口比率、パラグアイ川の豊富な水量を利用した水力発電により自国で使用する以上の発電量の確保、そして物価の安定的で緩やかな上昇と税金の安さがある。
・税制や輸出に関する有利な制度（マキラ制度）もあり、巨大な南米市場に有利な条件で参入することが可能。
・アスンシオンには日本からの派遣教師を有する日本人学校がある。
・日系医師会があり、日本語が通じる医師が存在するため、いざという時に安心である。
・日本からパラグアイに対しては、経済協力関係から日系企業が進出する直接投資の関係へと変化してきている。本県近辺では、岡山県の萩原工業が進出している。
・スポーツではメキシコ発祥のラケットスポーツである「パデル」が盛んであり、ジュニア選手権では日本人選手12名が参加をした。

パラグアイの魅力を伺い、南米を横断する大陸横断回廊構想なども重なり、今後パラグアイの経済発展はしばらく続くものと認識した。

また、県内企業の進出にも適しており、大使館、商工省、在パラグアイ日本商工会議所、JICA、JETROが連携し、投資環境整備や企業立地など「ワンウィンドウ（１つの窓口）」でお手伝いさせていただくとの力強いお話をいただき、県内企業などへの周知を県議会として取り組んでいきたい。

懇談の様子

記念撮影

（６）在パラグアイ日本商工会議所訪問

令和５年11月13日（月） 14:45～16:00

応対者：会頭 黒﨑 デニス 幸雄 氏ほか役員６名

同行者：パラグアイ香川県人会会長 山西 司朗 氏

概　要：

パラグアイ商工会議所の沿革、構成メンバー、パラグアイにおける日系企業を取り巻くビジネス環境等についてご説明をいただくとともに、本県企業の進出にあたっての助言をいただいた。

・日系企業を主とする53の会員で構成されている経済団体で、パラグアイ香川県人会初代会長故笠松尚一氏が初代、第３代、第14代の会頭を務めていた。

・通貨が安定していること、GDP成長率が４％程度と比較的高く安定していること、さらに新大統領の政権は政治的に安定しており、今後50万人の新規の雇用創出を目指すという目標を持っていることから、今後の国力の発展が多いに期待できる。
・パラグアイは電力をほぼ100％水力で発電し、このクリーンエネルギーを他国にも輸出している。
・映像関係やＩＴ関係で、時差を活用し日本が夜の間にパラグアイで作業をして送る企業もある。
・2017年と2019年に実施した「JETROビジネス投資環境視察ミッション」については40社前後の参加があった。コロナ禍で中断していたが、できるだけ早く再開したい。
　→　本県においても情報収集に努めるべきである。
・パラグアイも現在、建設ブームであり、本県の建材会社の進出にメリットがあるとの提案を受ける。
　→　検討を深める必要性がある。
・パラグアイでの勤務時間は48時間/週であり、真面目に働くが仕事が不足している状況にある。（人材は豊富）
　→　これらを活かすためには進出企業が生産の現地化を図り、現地の方を３年～５年教育することにより労働力として確保するとともに、外国人労働者も入りやすいなどのメリットをＰＲする必要性がある。

質疑応答の席で、商工会議所の方々にもパラグアイでの企業進出について率直に伺ったが、「企業進出においてワンウィンドウで対応している」と、在パラグアイ日本大使館の中谷大使と同様のお答えをいただいた。

イメージとして企業が海外展開においてハードルとなるのは事業を申請する窓口がいくつもあり、手続きの複雑さや、その国特有の特異な商慣例など一つ一つクリアする必要があると思っていた。しかしながら、パラグアイにおいては日系企業が進出するための必要な手続きを手伝ってくださり、パラグアイにおける企業間のネットワークづくりにも支援をいただけるとのことであり、こういった商工会議所の活動を県内企業にも広くアピールしていく必要があると強く感じた次第である。

日本から遠く離れた国ではあるが、日本語が通じることで意思の疎通もとりやすく、投資や企業参入などに対する参入障壁が低く、非常に魅力的な市場であると感じた。

懇談の様子

記念撮影

（７）ブラジル日本移民開拓先没者慰霊碑献花・参拝、日本館見学

令和５年11月14日（火） 8:30～9:30

応対者：ブラジル日本都道府県人会連合会

副会長 谷口 ジョゼ 眞一郎 氏、副会長 大間知 アウフレッド 諒士 氏

同行者：ブラジル香川県人会 会長 高橋 エルザ 氏、副会長 菅原パウロ農夫男 氏

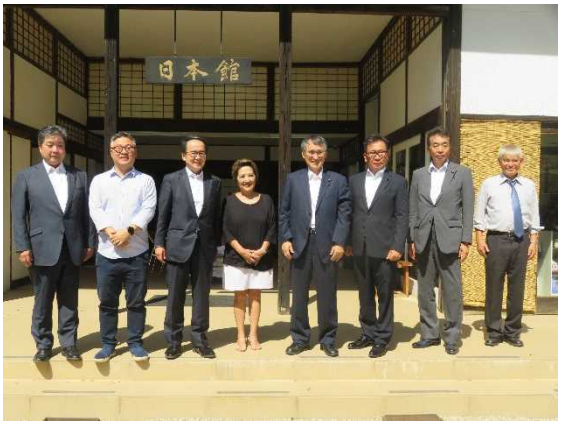
概　要：

サンパウロ市内のイビラプエラ公園内の日本移民開拓先没者慰霊碑を参拝させていただいた。県人会連合会の大間知副会長様から「先没者」の意味、すなわち入植者の中でも現地の厳しい労働環境の中、地元伝染病などで亡くなった方々や上陸が叶わず船の中で亡くなった人々、そして乳児に至るまで、この地で眠るブラジル移民の先駆者の皆様を「先没者」と呼び、その名前を書き残し弔われていること、そしてサンパウロを代表する公園の中になぜ日本だけが苑地を構えることができたのかといったお話を聞き、パラグアイと同様に、国策としてこの南米の地を目指し、期待と希望を持って訪れたこの地で、原生林を自らで切り開き、道路や電気などのインフラも十分でない絶望にも近い思いを抱きながら、日本人としての尊厳を失わず、あるもので作り出すという工夫を重ねながら、現在の日系人としての地位を築き上げて来られた方々に対して心から尊敬と哀悼の気持ちでお祈りをさせていただいた。

参拝後、日本館を見学させていただいた。日本館はイビラプエラ公園の慰霊碑に隣接し、1954年のサンパウロ市政400周年を祝し、日本政府とブラジル日系社会が協力して建築・寄贈されたブラジルにおける唯一の純日本式建築で、1997年にサンパウロ市の永久保存建築物に指定されたものである。サンパウロ市政400周年祭の後には全ての建物が取り壊されたが、「日本館」だけは価値の高さなどから残された。このことからも、日系社会の影響力の大きさと親日国家であることなどがうかがえる。

ブラジル日本文化福祉協会　日本館運営委員会委員長の栗田クラウジオ様に館内を紹介いただいた。日本文化を伝えるプラットフォームになりえるものであり、当日は平日ではありながら現地の方と思われる若い旅行者も訪れており、こういった場所で日本や香川県の物産の紹介、日本への観光の情報発信がこれまで以上にできるよう、交流推進にしっかり取り組む必要があると感じた次第である。

慰霊碑前で説明を受ける



日本館にて

（８）在サンパウロ日本国総領事館訪問

令和５年11月14日（火） 10:00～11:00

応対者：首席領事 小室 千帆 氏、領事 市山 拓 氏

同行者：ブラジル香川県人会 会長 高橋 エルザ 氏、副会長 菅原パウロ農夫男 氏

概　要：

サンパウロにおける日系人社会の現状と課題を伺った。人口が膨れ上がり、地価や物価の上昇が続き、それに伴う社会課題が様々浮き彫りとなり、ブラジル国民の格差は公表されている以上に広がっている現状を伺った。また、人口は推計であり、正確な人口ではないなどのお話を伺い、日本の国勢調査の素晴らしさ、その精度の確かさを改めて認識するに至った。

メルコスール経済圏の発展は今後も見込まれることから日系企業の進出、規模拡大は続いており、ブラジル経済の牽引役になっていることは間違いないところである。

知事からは日本における労働者不足に対し日系人の訪日を望むとの意見を述べたが、距離や賃金の問題だけでなく４世以降のビザの問題など二国間での法律問題もあり、ハードルがまだまだある旨のお話があった。

実際、日本における東南アジアからの技能実習や特定技能での人材確保についても、海外との為替の関係や実習制度の限界など、日本の労働環境は周辺先進国に比べて魅力に劣る現状があり、単純労働だけでなく高度人材確保についても危ぶまれる現状から、県内企業の労働力確保、国外進出の支援、申請の簡素化など取り組むべき課題について、我々県議会としても認識を深めることができた。今後は現状を踏まえ速やかな検討と施策の実行を進めていく必要がある。

意見交換の様子

記念撮影

（９）ジャパン・ハウス・サンパウロ訪問

令和５年11月14日（火） 11:30～12:30

応対者：副館長　カルロス・ホーザ氏、栗田 クラウジオ 氏　外

同行者：ブラジル香川県人会副会長 菅原パウロ農夫男 氏

概　要：

ジャパン・ハウスは戦略的対外発信の強化に向けた取り組みの一環として外務省が世界の３か所に設置したものの１つで、展示スペースのほか、レストラン、ショップ等商業スペースも備えており、同施設がサンパウロ市民にどのように受け入れられており、彼らが日本のどのような文化、製品に関心を持っているかを

確認した。

当日は日本のロボットをテーマにした展示を行っており、ヨーロッパ社会において、ロボットはあくまで社会生活や労働環境で人間をサポートするものという立ち位置であるのに対して、日本のロボットはアニメでも広く浸透しているように人に寄り添うものであるという特殊な立ち位置にあること、それこそが日本人の思いやりや癒しと言った精神面でのサポート役であることが展示紹介されており、平日にも関わらず大勢の観客が訪れていた。

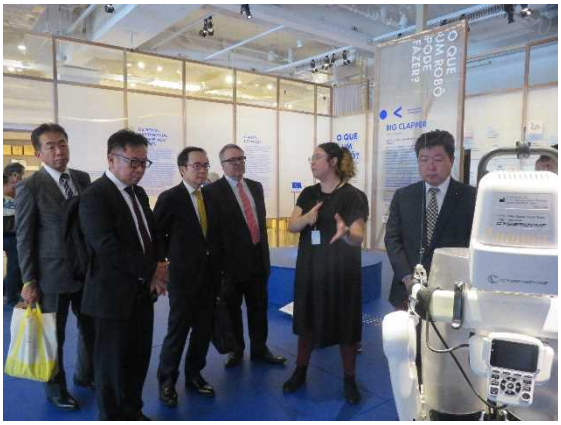
展示の見学後、四国遍路、瀬戸内国際芸術祭について知事からＰＲを行った。

ジャパン・ハウスでの最大の関心ごとは旅行であり、短期査証の相互免除も追い風になると思われる。JNTOのブースもあり、ＰＲについての協力の申し出をいただいた。

サンパウロには教会へ向かう際のお遍路的なものもあり、また、現在、関係者20人規模で四国遍路を行っていること等から、四国遍路に対する関心もＰＲ次第で高まるものと思われる。

瀬戸内海沿岸７県の食を中心とした魅力をＰＲする「瀬戸内探訪」が2021年には２回開催され、瀬戸内の魅力発信にもご尽力いただいている。

お客様を呼び込むには、まずお客様の嗜好を知る必要があり、ジャパン・ハウスの役割は重要であると感じたと同時に、東京新橋の香川・愛媛せとうち旬彩館の更なるブラッシュアップの必要性を重ね合わせながら見学をさせていただいた。我々も情報発信拠点における効果的な情報発信方法などについてアドバイスできるよう様々な視察や意見聴取を積極的に行う必要があるものと強く感じた次第である。



ロボット展示を視察

意見交換の様子

（10）ブラジル香川県人会員農園訪問

令和５年11月14日（火） 15:55～18:00

応対者：ブラジル香川県人会会員 川染 正春 氏、川染 エリヲ 氏

同行者：ブラジル香川県人会副会長 菅原パウロ農夫男 氏

概　要：

親子二代で花農家をされている川染様御一家の農園を訪問した。

サンパウロから車で１時間半ほど走り、農園近くまで行くと未舗装の悪路が続き、本当に農場があるのかと不安になるほどであった。

温かくお迎えくださったご子息のエリヲ様は、平成３年に香川県の農業試験場

で花作りを学んだ経験があり、我々訪問団の来園をとても喜んでくださった。苗木と出荷前の施設を見せていただき、もともと花を買ったり飾ったりという習慣のなかったブラジル人にどのような花が喜ばれるのか研究を重ねていること、また、お父様の正春様の入植当時のお話を聞かせていただいた。その中で、仕事に向き合ってきたお話に対して感銘と尊敬の気持ちを持たせていただいた上でいろいろ質問をさせていただいたが、丁寧にそして感慨深く話してくださった。

ご自宅でお茶をご用意いただき、お招きくださった。お孫さんも含めご家族の皆さん、友人だというイタリア系の移住者の方もお手伝いくださったと言うお菓子や料理はどれも美味しく、ご子息のエリヲ様の日本での実習時代のアルバムを挟み、川染様親子と訪問団で和やかな時間を過ごせたと同時に、この地で50年以上花農家を持続させて来られたということは、時代の嗜好をしっかりとらえること、そして地域に根付き周りの方々と共生していくことが大切であるということをお伝えいただいた。

農園にて説明を受ける

入植当時の写真等を拝見

(11) ブラジル香川県人会歓迎夕食会

令和５年11月14日（火） 20:00～22:15

出席者：ブラジル香川県人会会長 高橋 エルザ 氏ほか県人会役員等15名、
来賓３名、県からの派遣大学生・引率者５名、訪問団９名

概　要：

県人会幹部の方や香川県から先発でサンパウロに来て交流活動をしている香川県の大学生たち、領事をはじめ関係団体の方との夕食会が開催され、参加させていただいた。

出席者や我々訪問団の紹介の後、高橋会長から開会の言葉があり、知事の挨拶、来賓の市山領事の挨拶が行われ、新田議長の乾杯の音頭で、会が始まった。

短い時間ではあったが、香川県から剣道指導などのお手伝いに来ている何人かの方々ともお話をさせていただき、県として知事自らが訪問し、さらに議長だけでなく議員も含め大勢の訪問団が来てくれることが県人会の皆様にとって励みになり、会の維持と次世代への継承に大きな意味があると伺い、遠く離れてはいるが、同じ県民としてこれからも大切にしていくご縁なのだと大変心が熱くなった夕食会であった。

新田議長による乾杯の発声

（12）ブラジル香川県人移住110周年記念式典・記念昼食会

令和５年11月15日（水）10:00～15:00

出席者：ブラジル香川県人会会員等、来賓、訪問団　約230名

概　要：

記念式典は、南米香川県人会館の２階ホールで開催された。

ブラジル香川県人会の菅原パウロ農夫男副会長の開式の辞の後、物故者に対する慰霊祭が地元南米大神宮の宮司様により神式で行われた。

君が代・ブラジル国歌斉唱の後、ブラジル香川県人会の高橋エルザ会長から挨拶があり、池田知事、新田議長、在サンパウロ日本国総領事館の小室千帆首席領事、ブラジル日本都道府県人会連合会の市川利雄会長ほかから祝辞があった。池田知事と新田議長から、移住高齢者表彰、知事表彰、記念品贈呈等を行った後、ブラジル香川県人会功労者表彰が行われ、元研修生代表者の辞の後、川染エリヲ様が閉会の辞を述べ、香川県民歌の斉唱で式典は終了した。

祝辞の中で、昨年から今年にかけて日本から昨年は６県、今年は15県の訪問団が在ブラジル各県人会の式典のためブラジルを訪問しているとの話があり、この式典にもブラジル各地の日本県人会の会長さんたちが集まっていた。

祝辞を述べる新田議長

記念撮影

式典終了後、会場を１階に移して記念昼食会が催された。

高橋県人会長、池田知事、新田議長によるケーキカットの後、新田議長の乾杯の音頭により、会食が始まり、参加者との意見交換を行った。

JICA ブラジル事務所の江口雅之所長様とは、パラグアイの JICA を訪問させていただいたことや、ブラジル JICA の取り組みについて質問させていただいた。技術支援という人づくり、インフラ整備など南米における独立行政法人としての役割について改めて伺うとともに、社会経済や政治動向に対する情報収集、気候変動に伴う災害などの激甚化に備えるための円借款などの事業のお話もお聞かせいただき、心強い団体だと改めて認識を深めたところである。

ベレンからお越しの北伯香川県人会の稲垣様からは、ブラジルにおけるご自身のこれまでの経緯、そして携わる企業活動についてお話を伺った。４歳の頃両親に連れられ兄弟とともにブラジルに移り住んだ１世の稲垣様は、現在、事業をご子息たちに委ね、県人会活動に精力的に取り組んでいらっしゃるそうである。事業内容としては洋服や小物雑貨を扱う店舗を複数店所有し、現在は日本の大手小物販売の代理店契約を結んでいるとのことであり、地域社会で信頼を得ながら持続的な経営を営むことは大変なことであるが、そのような中、実践拡大することができていることは、事業を始めてみようと考えている方にとって大切なお手本となり、メンター的な存在になる方だと感じた。海外進出する際、大小を問わず政府機関が支援をしてくれるものの、実際地域社会の慣習や守るべきルールが分からず頓挫することは往々にしてあるものである。しかしそのような時に経験豊富なメンターがいてアドバイスをいただけることは大きな心の支えである。こういった事業者やコミュニティの活動を支える県人会の存在は大変重要であり、香川県人会が母県と呼ぶ香川県で活動する県議会としては、こういった県外の県人を支えていくことは香川県の発展に大きく寄与するものであり、積極的に関わっていく必要があると考える。

また、昼食会では、同時期にブラジル青少年派遣事業で訪問している香川県内の大学生によるプレゼンテーションや、剣道部のデモンストレーションがあり、最後は、盆踊り「一合まいた」を大学生のお手本で出席者も参加して踊り、会場は大いに盛り上がった。

県人会の幹部の方々はそれぞれに事業を持ち、多くの時間とお金を県人会のために注いでいる。この御労苦に深い敬意を感じた昼食会であった。

また、これはパラグアイでも同様であるが、次世代への継承に現役世代が心血を注いでいる姿勢はとても好感を得た。

記念ケーキカット

県人会の皆さんと「一合まいた」踊り

（13）在ロサンゼルス日本国総領事館訪問

令和５年11月17日（金）9:30～10:20

応対者：総領事 曽根 健孝 氏、首席領事 青島 尚重 氏

同行者：南カリフォルニア香川県人会会長　國宗 奈緒美 氏

概　要：

瀬戸内国際芸術祭の紹介や、県産盆栽の販路拡大、インバウンドの需要喚起について意見交換を行った。

・ハンティントン財団庭園に「SHOYA HOUSE」（旧横井邸）が移築をされたことに対して、日本の文化を身近に実際に感じることができ、現地の方々は大変喜んでいるようである。「SHOYA HOUSE」において日本の代表的な文化であるお茶会が開けないか検討する。

・知事より瀬戸内国際芸術祭のＰＲを行う。来客数120万人のうち40万人が外国人であり、大阪・関西万博に合わせて多くの方に訪問していただきたいとの依頼に対し、総領事より、JNTOデスクもあるジャパン・ハウスにおいてＰＲすべきとのアドバイスをいただく。兵庫県知事、ＪＲ東日本もＰＲに訪れている。

・知事より県産品販路拡大のＰＲを行う。このうち、オリーブ牛についてはオレイン酸の含有量が多く米国の健康志向にマッチしているとの評価をいただく。香川県産が全国の８割～９割を占める松盆栽については米国においても人気が高いが、黒松については現時点では輸出ができない状況である。

→　今後の交渉に期待したい。

・日本文化では太鼓、日本舞踊、詩吟などが人気であり、今後の県産品の売り込みやインバウンドの誘致に生かすべきである。なお、ジャパン・ハウスにおいては、岡山県の犬島アート展が行われた。

→　本県の瀬戸内国際芸術祭の舞台となる島々のアートの情報発信を行うことも必要。

意見交換の様子

記念撮影

（14）全米日系人博物館訪問

令和５年11月17日（金）10:30～12:00

応対者：渉外担当ディレクター　三木 昌子 氏

同行者：南カリフォルニア香川県人会会長　國宗 奈緒美 氏

概　要：

戦前日本から入植したアメリカでの移民の歴史について、説明を受けながら館内を視察させていただいた。

明治元年よりハワイへの出稼ぎ労働として始まった移住は、幕末に起こった政変や飢饉、大地震などの社会背景と農家など多子世帯が多かった時代でもあり、かつ国内では耕作面積に限界かあったことから海外での出稼ぎは苦肉の選択であったに違いない。

１日14時間にも及ぶ農作業は大変な重労働であったことは容易に想像がつく。日差しを避けるためかすりの着物を改良し、全身を覆う形に裁縫し直すなどの工夫や、日本人らしい勤勉さで当時も存在感を示していたことがうかがえた。

かすりの着物はやがてアロハシャツとなり、草履は現地のゴム製品と融合しビーチサンダルとなるなど、ハワイの衣食住に大きな影響を与えたことも知った次第である。

日本によるハワイ真珠湾攻撃は、当時のハワイの人口の４割近くを占めるハワイ日系人にとって、日本人による日系人への攻撃と当時は受け止められたそうである。

その後、日本人に対する差別と重なり、ハワイとアメリカ本土西海岸に住む日系人は収容所に送られることとなる。財産の大半について没収や買い叩きが行われるとともに１人トランク２つ分の荷物の持参が許されただけで、かつ短期間の間にアメリカ国内の10か所の収容所に送られた。

収容所の生活は苛烈を極めたが、工夫を重ね、食料に関しては沼地や条件の悪い農地を与えられながらも、日系人農学者などの指導により肥料設計などによる土壌改良が行われたことで農作物に余剰が生まれたところもあったようである。

入植の１世には国籍が与えられなかったものの、２世はアメリカの法律に従い国籍が与えられた。１世は自分たちの子どもに十分な教育をさせてあげたいとの思いがあり、日本人学校をつくるなど高等教育にも熱心に取り組んだ。

第２次世界大戦中の２世たちはアメリカ国民として従軍し、ヨーロッパ戦線や太平洋戦線で活躍したが多くの勲章を手にしながら多くの犠牲も払わなければならなかった。

また、日本の戦中戦後処理にも尽力したが、戦後長きに渡り日系人の名誉が回復することはなかった。３世などが立ち上がり戦時中の収容所への人種隔離政策に対する不公平な対応に対する訴えは、レーガン大統領による日系人に対する名誉回復と賠償金の支払いにより一つの区切りをつけることとなった。こういった歴史を経て現在の日系人コミュニティが形成されている事実を訴えるためのこのミュージアムは、民間の寄付により運営されている。

こういった歴史を知ることなく現在の世界における日系人の活躍を語ることはできないものと考える。私たち日本国民はそういった日系社会と連携を図ることが国際社会において大変重要となることを学び、その学びの上で社会活動や経済活動で協力していく必要があることを改めて感じた次第である。

収蔵品の説明を受ける

展示の収容所バラックにて

(15) ジャパン・ハウス・ロサンゼルス訪問

令和５年11月17日(金) 12:30～13:55

応対者：館長 海部 優子 氏　外

同行者：南カリフォルニア香川県人会会長　國宗 奈緒美 氏

概　要：

ジャパン・ハウス・ロサンゼルスは、ハリウッドの大型複合商業施設の２階と５階にあり、２階のギャラリーでは、「POKEMON×KOGEI」展が開催されていた。ポケモンの人気は絶大であり、同じ階のショップでは日本の伝統や文化の情報発信、物品の販売が行われていた。

５階では、６月にオープンしたレストランを見学した後、同じ階のサロンで意見交換を行った。香川県の県産品の紹介、瀬戸内芸術祭、お遍路によるインバウンドに向けた取り組みをお伝えする等、香川県の魅力発信を行った。また、香川県の食材を使った香川フェアの開催など今後の取り組みについて前向きな意見交換が行われた。

・知事より瀬戸内国際芸術祭、ヤドン、漆器、盆栽のＰＲを行う。インバウンド誘致においてはJNTOデスクの活用や、県産品販路拡大においては展示会の開催など、積極的なご提案をいただいた。
・サロンでは、コロナ禍前、盆栽のパフォーマンスが人気であり、ロスにも日系人の盆栽の会があるとのことである。
・レストランでは、兵庫県が日本から食材を送って試食会を行ったとの話があり、県産品を用いての食事会の開催などについてご提案をいただいた。

2028年のロサンゼルスオリンピックの際には世界中から多くの人々が集まるため、その機会を捉えて情報発信をしようと、その下準備としての活動が始まっているようで、既に他県でも文化や伝統芸能の発表など、このハリウッドにあるジャパン・ハウスを使って情報発信を行っているようである。本県においても、今回の訪問を契機として、ジャパン・ハウスを活用した情報発信を進めるべく、県議会としても取り組んでいきたい。

館内を視察

海部館長と意見交換

(16) ハンティントン財団庭園訪問

令和５年11月17日(金) 15:30～17:35

応対者：理事長 カレン・ローレンス 氏
　　財団管財人 サイモン・リー御夫妻、専門学芸員 ロバート・ホリ 氏　外
同行者：南カリフォルニア香川県人会会長　國宗 奈緒美 氏
概　要：

丸亀市から移築された「SHOYA HOUSE」(旧横井邸)を拝見した後、財団の役員等と意見交換をさせていただいた。予想以上の大歓迎であった。

ジャパン・ハウスと同じく、香川県側からは県産の工芸品や盆栽の展示、瀬戸内芸術祭などの紹介をさせていただいた。ハンティントン財団側からは、これまでに築いてきた良好な関係をさらに促進するために、姉妹公園である栗林公園との人的交流などの提案があり、これは未来に向けた相互の人材育成につながるものであり、非常に大きな成果となったものと感じるとともに、今後の更なる交流の深化に向けての大きな一歩となったものと考える。

・10月21日にオープンした「SHOYA HOUSE」については、身近に日本文化に触れることができる大変に良い取り組みであると評価をいただいている。今回の移築を契機として、日本の木造建築に興味を持つ人も増えたと感じている。今後、日本の匠におこしいただきレクチャーしていただける機会を設けるよう検討する。
　→　本県の伝統工芸のＰＲにもつながる取り組みである。
・知事より盆栽のＰＲを行う。ハンティントン財団庭園にも栗林公園より寄贈された盆栽があり、今後、「SHOYA HOUSE」などで展示会を開くことも考えられる。輸出入規制の問題もあるが前向きに検討いただく。
・日本の漆器についても米国では関心を持つ方が多く、「SHOYA HOUSE」においてＰＲできないか、前向きに検討いただく。
・両庭園における庭師の相互交流や、同財団からの20人規模の本県への訪問、「SHOYA HOUSE」を活用しての江戸時代に関連した伝統工芸品や美術品の紹介、瀬戸内国際芸術祭への参加の可能性を含む美術展とアーティストの交流といった積極的なご提言も文章にていただいた。

「SHOYA HOUSE」にて

財団役員と意見交換

(17) 在ロサンゼルス日本国総領事との夕食会

令和５年11月17日(金) 19:00～21:20

出席者：総領事 曽根 健孝 氏、首席領事 青島 尚重 氏、領事 中村 晴彦 氏
南カリフォルニア香川県人会会長　國宗 奈緒美 氏、訪問団

概　要：

総領事公邸にて夕食を交えながら、農水省から出向されている中村領事も参加し、盆栽のアメリカへの輸出、オリーブ農水産物の市場開拓などについて意見交換が行われた。

・県産品の輸出に関して、オリーブハマチは有望で、昨日の県人会でも試食があった。

・アメリカはサステナブルに敏感で、養殖の方が好まれる。今マイアミで宇和島水産高校がマグロの解体ショーを行っている。

→　多度津高校に話をしてみたい。

・アメリカでも盆栽は人気があるが、黒松が輸出できないため、できるだけの協力を県として求める。

・盆栽ガールズはアメリカ人に広く受け入れられると思うため、交流事業の一環としてハンティントン財団庭園に派遣してはどうか。

→　世界遺産登録を目指す「お遍路」をより広く知っていただくことも重要であり、お遍路を紹介・情報発信するキャラバンをつくったらどうか。

・アメリカのオリーブの99%はカリフォルニア産である。香川県は南カリフォルニアと同じ気候であることをＰＲしてはどうか。

現状様々な問題点があるが、それらを一つ一つ解決していく必要があり、問題解決に向け取り組んでいただけるよう話し合いが持たれることになったことは、大きな成果といえると思う。

懇談の様子

(18) Tokyo Central Gardena店視察、意見交換

令和５年11月18日(土) 8:15～9:05

応対者：店長 ヒロコ・ヨシアキ 氏　外

概　要：

商品展示について調査を行いつつ、店長様ほかからお話を伺った。

・現在、東北フェアを開催中で、11月23日から29日まで宇和島パールフェアを開催するとのこと。四国フェアの開催も予定しており、その時は香川県のＰＲもしっかりと行っていただけるとのご提言をいただいた。

・うどんや冷凍食品などはアメリカで現地生産を行っており、日本からは輸送コストの面からも、冷凍搬送が可能で付加価値の高いオリーブハマチやオリーブ牛などが適している。

アメリカの利上げは物価の上昇にある程度歯止めがかかり、来年には利上げの停止が見込まれるが、失業率が低いままの状態が続き、それに伴う賃金上昇が続けばその予想が覆ることもあり得る。また景気後退の局面に向かえばこれまでの好景気の裏返しで不景気が長引くことも頭に入れておく必要がある。

しかしながら、日米の物価の違いや円安ドル高傾向は日本からの輸出にとっては追い風であり、失われた30年を取り戻すためにも、アメリカへの販売促進は欠かすことのできない施策であり、県を挙げて県産品振興と県内事業者における販売力強化、輸出促進に努める必要があると強く感じた次第である。

店舗エントランスにて

7　所感（成果及び県政への反映方策）

議長　新田　耕造

今回現地にてメモを取った原文を生かし、その時々に感じたことを載せて、私の報告書といたします。

＜パラグアイ・アスンシオン＞

パラグアイの香川県人会創立50周年式典では、「母県からの慶祝団をお迎えして」で始まった山西会長の挨拶に、最初は「ボケン」という言葉の意味が一瞬分からなかったのですが、「母県」と分かり、我が香川県を大切に感じていただいているという気持ちが伝わってまいりました。

いろいろとお話を伺っていると、パラグアイはインフラ整備がまだまだですが、今後５年で大陸横断の道路が開通し、太平洋にも大西洋にも道が通じるので、発展が期待されると思いました。

また、在パラグアイ日本商工会議所では、日本からの進出企業があればその支援体制が整っているということでした。

それから、当時の日本人移民の方々の素晴らしさは、雨露を凌いだ後、まず学校をつくり、教育に力を入れたことでした。本当にその当時の姿が想像され涙が出る思いでありました。食生活の面でも、肉が中心の食生活に、日本人がいろいろな野菜の栽培を行い、食べることを広めたということでした。

JICAや大使館の話でも、パラグアイは南米にあっても政治は安定しており、物価も経済も比較的落ち着いているということで、中谷大使によると近年若い日本人の移住者が増えているとのことでありました。

○　日系社会福祉センター

皇室外交の重要性を実感する。眞子様の訪問時には、本当にパラグアイの国を挙げての大騒ぎだったようだ。移住者の過去の歴史とか入植の模様等の説明を聞き、写真展で現在と過去の写真の展示があったが、眞子様の写真が光っていた。

JETROの派遣制度で訪日した方（移民３世）の話を聞いた際、日本語を分からない人が増えてきたが、こうした歴史を残していかなければいけないと思うと話していた。

今、気温は 41 度、ほんとに疲れた。

○　パラグアイ香川県人会歓迎夕食会

いろいろと現地の話を聞いた。上院議員は45名、下院議員は80名、今回初めて日系人１人が上院議員に当選した。大統領の任期は５年。など

何人かの人は、1988年瀬戸大橋開通の時、香川県から南米日本人会に招待があり、夫婦で瀬戸大橋を見に行った思い出を語ってくれた。

○　パラグアイ香川県人会創立50周年記念祝賀会

アルゼンチンの話を聞いた。アルゼンチンの資本がアスンシオンに入ってきており、金持ちの財産保全のためのようである。アルゼンチンではインフレがひどく、国民が自国の通貨を信用していないので、ドル決済が喜ばれる。

＜ブラジル・サンパウロ＞

まず、ブラジルの第一印象は、思ったよりも安定しています。都市部の開発も盛んに行われて都市化が進んでいました。政治についても、日本で報道されているほどボルソナーロ前大統領は右派でもないし、ルーラ現大統領は左派でもないと現地の関係者から伺いました。

最大の日系人社会がある国であり、我が国も世界で３か所しかないジャパン・ハウスの１つをサンパウロに設置し、日本の伝統文化などの情報発信を行っており、香川県もこうした施設を活用して瀬戸芸やお遍路の宣伝をする必要性を本当に感じました。

また、ブラジルは多様な人種が住んでおり、日系ブラジル人が日本に行った時に何でこんなに日本人ばかりがいるのか不思議だったというほど、ブラジルは様々な人種が抵抗なく住んでいる国のようです。

○　ブラジル香川県移民110周年記念昼食会

元会長の浜岡さんが、７月の副知事訪問時に発言したことで今回の大騒動になったのではないかと心配していた。浜岡さんとしては、派遣団の宿泊はセキュリティ上ホテルに泊まって欲しいし、これほど我々が頑張っているのでぜひ多くの皆様に来てもらいたいと言いたかったのだと悔やんでいた。

また、ある県の会長は今回の香川県の派遣騒動を気にしていた。来年は自県が記念式典を予定しており、これに悪影響があるのではと心配であり、今回の香川県の件を詳しく聞きたいとのことであった。

いまやネット時代、世界で香川県のニュースが見られる。香川の出来事が世界に影響を与える時代になってきた。フェイクニュースが飛び交う世の中である。我々は益々正しい事実を発信していかなければならないと思う。

＜アメリカ合衆国・ロサンゼルス＞

飛行機の遅延により南カリフォルニア香川県人会の会合には出席できなかったものの、その他の日程はほぼ全てこなすことができました。県人会の國宗会長さんが帯同して各訪問先をご案内していただき、現地の様々な状況もお聞きしました。現地で今、明らかなのは2028年のロサンゼルスオリンピックに向けて各県が既にインバウンド情報、文化芸術、県産品の輸出販促のため、あるいは地域おこしのため、訪日客誘致のための活動を既にしているということでした。

各県が地元産品輸出のため全米でフェア等を行っており、たとえば、高知県、三重県、愛媛県も積極的に取り組まれているとのことです。

また、この秋までに、数人の知事がもう既にロスに来て各種のフェアなどを実施しているとのことでした。

○　ロサンゼルス国際空港

2028年のロサンゼルスオリンピックに向けて地下鉄工事や空港の拡張工事が行われている。空港への地下鉄も工事中であって、活気がある。

＜今回の派遣について＞

南米移民は、日本のほとんどの県が、特に戦後は国策として進めた経過があります。その歴史や開拓者の努力を現代の人々にお知らせする必要があると思います。

本当に地球の反対側で、同じ日本人が原野を開拓して暮らしていたことを知らないといけないと思います。また、その人達が現地の習慣に影響を与えたこともあったようです。たとえば南米で野菜を食べるという習慣を根付かせたのは、日本人移民のようです。

今回の日程は本当にタイトで、もっと現地を知る機会を増やす必要があります。ほとんど会場とホテルの往復で費やしたのは残念で、突発事項等に対応できる余裕ある日程を組む必要があると思います。

移住者達がまず最初に行ったことは学校をつくることであったと聞いた時は、頭の下がる思いでした。本当にそういう勤勉な日本人があったと思いました。

南米で貿易業の方からは「うどん」はまだ認知されていないので未開の市場だから面白いと思うという話がありました。

特にブラジルに関しては、２億人の人口を有し、若年者が多く、まだまだ若い国であるので、今後の発展の可能性が非常に大きいと思いました。

そうした今回全ての会場の挨拶で、私は香川県の少子・高齢化と増える空き家のことを申し上げ、訪日をお願いしました。

反省点

今後の話として、今回の派遣を県民の皆様に正しく理解してもらうためには、報道機関の皆様の協力が不可欠だと思います。今後、情報発信のあり方などを考えていきたいと思います。

議員　氏家　孝志

パラグアイ香川県人会創立50周年記念式典、ブラジル香川県人移住110周年記念式典におきまして、現地の県人会の皆さまとともに周年のお祝いができたこと、また、現地で活躍されている県人会の方との交流を通じ、友好関係が築けたことは、大きな成果であったと感じております。

この訪問を通じて、多くの現地県人会の方々と意見交換させていただく中で、やはり、移住が盛んに行われていた頃から相当の年月が経過しており、会員の高齢化がかなり進んでいること、そして、子や孫の世代へ引き継がれている方も多くいる中、香川を直接知らない会員や日本語を話せない会員の方も、相当増えてきておりますが、このような中、県勢発展のため、これまで築き上げて来た良好な関係を継続、発展させていくためにも、今後、友好交流事業の重要性がさらに増してくるものと改めて認識させていただきました。

また、ブラジルにおきましては昨年に６県、本年には本県を含めて15県の訪問団が周年の記念式典に参加されるなど、全国各地で活発な友好交流事業が展開されています。このような中、本県におきましても「多文化共生社会」の実現の重要性が叫ばれる中、「国際化の推進」は県政においても非常に重要な政策課題となっています。また、友好関係の強化は互いの信頼関係の強化につながるものであり、この信頼関係の強化は絆へとつながり、大きなコネクションとして、これからの若年層を含めた各世代間での交流のより一層の活発化や国際感覚の醸成、本県のＰＲや本県企業進出時等における強力なバックアップなど、本県の発展に対して必ず成果があがるものと確信しております。このようなことから、今後ともに、これまでに先人の方々が築き上げてこられた友好関係の継続と更なる発展、次の世代への引継をしっかりと行っていくことが、今の我々に課せられた使命であると強く考えております。

このような中、今回のような交流事業は、現地の県人会の維持、発展に必要不可欠なものであり、現地の県人会の方々からも同様のご意見をいただいていることを申し添えさせていただきます。

また、北米訪問では、ハンティントン財団から、これまでに築いてきた良好な関係をさらに促進するために、両庭園における庭師の相互交流や、同財団からの20人規模の本県への訪問、本県から移築された古民家を活用しての江戸時代に関連した伝統工芸品や美術品の紹介など、積極的なご提言も文章にていただくなど、今後の更なる交流の深化に向けての大きな一歩となったものと考えております。

さらに、南米、北米各国の大使館や総領事館、ジャパン・ハウスといった外務省の対外発信拠点や、ロサンゼルスでは日系の大型スーパーなどを訪問し、意見交換やヒアリングなどを実施し、パラグアイにおきましては有利な税制や輸出制度を活用しての巨大な南米市場をターゲットとした企業進出や、まもなく開通を迎える南米大陸横断回廊を活用しての貿易の活発化、また、ブラジルにおきましては短期査証の相互免除による富裕層を中心としたインバウンドの積極的な誘致、ロサンゼルスにおきましては2028年のオリンピック開催に合わせての本県特産品のＰＲやインバウンドの誘致など、様々なビジネスチャンスのご提言をいただいており、今後、県内企業への周知や、取組みに対するバックアップなどにしっかりと取り組んで行く必要性があるものと強く認識させていただきました。

議員　白川　和幸

今回の南北アメリカ訪問を通じて、100枚を超える名刺交換を行いました。交換が行えずご挨拶してお話を伺った方も含め多くの方々から大変な知見をいただいた訪問であり、議員としての視野の広がりを得たと同時に、世界情勢の中のミクロ的な視点、つまりレポートやネットでの情報にはない、その地域に生きる人々の現実を知る機会を得たと感じています。

たとえば、パラグアイで訪問させていただいた日系社会福祉センターの女性職員さんから伺った話を紹介しますと、短期ではありますが交流事業を通じて横浜に来日された経験があり、初めての日本での生活において、景色や人口の多さ、町の清潔さ、公共交通機関の発達など驚かれたそうで、20代の女性にとって非常に刺激となったという話を伺いました。また、流行とはこういった若い感性から生まれるものであり、日本で見たもの、感じたものがパラグアイで受け入れられることで日本の文化の伝承と、特産品や工芸品の販路拡大につながるものと思うところであります。また、ブラジルのサンパウロでは、総務省の「中南米日系社会との連携促進事業」を活用し、香川県内の４名の大学生が交流事業で派遣されており、彼らが記念昼食会の中で香川県の魅力を伝えるプレゼンテーションを行っている姿を見ることができました。お話を伺うと、大学での勉強を生かして地域社会に貢献したい、農業技術を伝えたい、日本語の大切さを海外の方に伝えたいというそれぞれの思いを聞かせていただきました。こういった若い世代の方々の相互交流をより活発に進めることで、近代化を進める南米社会を支える人材の育成と、南米日系社会と本県の経済や文化の連携など、グローバルな視点を持って社会課題に応えうる次世代の人材育成と、今後の施策運営に大きく寄与するものと考えます。

今後も現地情報を得るため、今回ご縁をいただいた日系人の方と情報交換をさせていただき、引き続きリアルタイムでより実情を反映した情報を収集していきたいと考えています。

南米大陸横断回廊構想を伺うにあたり、世界的なサプライチェーン構築において、物流網や保存技術は今後益々整備され、輸入に頼る日本ではありますが、香川県の発展のためには海外との直接的な窓口を開拓し、産業の振興に努める必要があります。日本は高度成長期の成功体験が忘れられないまま現在に至り、先進国としてのプライドがありますが、今回の訪問を通じ、日系人の歴史を顧みても、戦後の復興で奇跡的な発展を遂げる前の日本は、貧しく、小さな島国であったことを想起すべきであります。

今、生産年齢人口の減少により、世界との比較で経済的にもそれを支える教育環境においても順位を大きく落としつつあります。

今、県が取り組むべきは県経済の発展に向けた積極的な財政支出という投資を行い、産業の振興、域内経済の縮小を補う県外海外への積極的な販売支援を行うことで、県民所得の向上を実現し、住みやすく安心して結婚、出産、子育て、教育ができる環境を整えることであります。

言葉にはできてもなかなかその道のりは厳しく険しいものですが、ロサンゼルス空港を出発する時に県人会の國宗会長が連れてきた若者は、大学を休学し１年間留学するとのことであり、希望に溢れた姿は心強く、サンパウロに派遣された大学生達も含め、日本をいったん離れて世界から日本を見る機会を多くの若い人たちに経験してもらいたいと感じた次第であります。

先に述べた産業への投資に加えて、人への投資は必ず本県の将来に大きく寄与するものと思います。そういうお手伝いをできるよう努めたいと思うとともに、これからの若い議員にもしっかり引き継いで、海外との交流を深める機会を失うことなく、この派遣事業の意義を強く訴えるものであります。

議員　里石　明敏

私は、先月10日から19日までの10日間、南米・北米訪問団派遣事業で、パラグアイ、ブラジル、アメリカ・ロサンゼルスを訪問する中、パラグアイ及びブラジル県人会の周年記念式典に出席し、祝意を表するとともに、県人会の方々とより一層絆を深め、友好親善関係の強化を図り、青年交流や県内企業の進出、県産品の販路拡大などの促進、本県のＰＲ等の協力をお願いしてきました。

また、日本国大使館等の公的機関やJICAなど日系団体等を訪問し、各地の現状や課題をお伺いするとともに、県産品の海外展開等について意見交換を行ってまいりました。

お話を聞く中で、移住された方々は、言葉の壁と想像を超えた過酷な環境の中での労働、差別や偏見等を受けながらも、日本人の忍耐強く勤勉で、手先の器用さなどから、自ら生活環境の改善や農業をはじめとする様々な分野の開拓に尽力されてきたことを知ることができました。

パラグアイ日系・日本人会連合会初代会長は、土庄町出身の笠松尚一氏で、1936年に、ブラジルに代わる新たな移住先国として、パラグアイ南東部にあるラ・コルメナ日本人移住地を開設後、1971年から日系社会の組織づくりに尽力された方です。

移住した日系人の方々は、現地の人たちが食べなかったトマトなどの野菜・果実の新品種導入や品質向上などで大きく貢献してきています。

戦後もパラグアイへの移住が継続したのは、ラ・コルメナ移住の創設及びその後の発展によるものと言われていますが、近年、パラグアイの各県人会は、２世３世に代替わりが進む中減りつつあります。そして、県人会のない県も増えてきていますが、四国４県の県人会は現在も活動を継続しており、県人会相互の交流もあるとのことで、今後、他県と連携して、より広域的で多様な活動もできるのではないかと思います。

また、記念式典や歓迎会等においては、香川県人会の方々と話をさせていただく中、我々訪問団などと交流し、日本の話をする機会をつくることが、ひいては県人会の維持と発展に大いに寄与するとのご意見を伺い、交流事業の継続の大切さを改めて実感しました。

アメリカに移動し、在ロサンゼルス日本国総領事館を訪問した際には、瀬戸内国際芸術祭の紹介や県産盆栽の販路拡大、インバウンドの需要喚起について意見交換を行いました。

特に、盆栽のアメリカ輸出、オリーブ農産物の市場開拓などの話をする中、現状、様々な問題点はありますが、それらを一つ一つ問題解決に向け、取り組んでいただけるよう、話し合いが持たれることになったことは大きな成果と思っています。

平成27年３月に栗林公園と姉妹庭園提携を結んでいる「ハンティントン財団庭園」には、丸亀市の古民家（旧横井邸）の移築工事が本年完了するため、招待されたことを受け、表敬訪問したものです。

18種類の庭園がある公園内を見学する中、日本庭園内にある移築した古民家（SHOYA HOUSE）を視察し、その後の意見交換では、ハンティントン財団側からは、

栗林公園との姉妹庭園として人的交流などの提案があり、未来に向けた相互の人材育成につながるものと両者が非常に前向きな意見が取り交わされ、大きな成果になったと感じられました。

また、ここでも盆栽の輸出入の制限が話題になり、漆器についても興味を持っている人が法人のみならず、現地の方々にも多くいることから、漆器の展示、財団の推薦するアーティストも紹介したいなどの提案もありました。

一方、本県からは、来日された際には、瀬戸内の島々をご案内し、日本の祭りなど伝統的な行事の体験していただく提案をしました。

栗林公園と唯一姉妹庭園提携を結んでいるハンティントン財団庭園との関係性の強化が図られたものと思います。

今回の派遣事業に参加し、各県人会や公的機関やJICAなど日系団体等との意見交換及びハンティントン財団との友好関係の強化などの重要性を再確認し、代表団の派遣を継続する必要性を実感しました。